

「酒田では砂丘とその土地利用を観察、松林をすかして塩海工場がみえた。けむがさかんに出ていて活気がある。ここでと時間が足らず、渡辺先生がみごとお歩きぶりを披露して下さった。」

「翌日は越後平野をつつほしり、亀田で下車、収穫時の真最中。その中のあぜをぬい砂丘の高い所に位置する集落を見に行つた。雨がさかんに降つてきた。この日は新泻泊り。新泻では地盤沈下を見た。信濃川は満々として、いまはとあふれ出るように感じを与える。海岸線には防壁をきずき、砂をまき海の威力に対し人間の努力がはらわれていた。新泻で、このかけ足巡検は終つた。

## 那須野巡検記

与謝野 たづ

その前の日まで苦しい試験があつた為、私達の巡検の支度はその前日の夜中までかかつた。それで上野に集つたみんなは如何にも頭がぼうつとしていて、ひよつとすると階段をふみはずしそうな顔付きをしていて。おまけにその日はドジャブりで、これからの旅行はどんなことになるやらと心配なななかつた。しかし豪雨に送られるがらとクラスの誰一人欠けることなく車中の客となつた。さて、汽車の中からも私達は窓外の地形を観察するようおせつかつた。

そこで平常は何とも思わずに見過している堤防をみては、みんなはあれが自然堤防だ、それが後背湿地だと真面目くさつて言うことになつた。いや、むじやきに言つてやるこんだ。

さて、汽車が東に向うに従つて空は晴れて景色ときれいに見えるようになった。あんなにドジャブりでつたのに、いかに東に来たからといつてこんなに晴れ上るなんてなんて不思議なことだろう。きつと私達の尊敬している田頃の生活態度の立派さが天にも分つていたからであろう。私達学生の行状はあまりよくないのだから。というわけでこの旅行は、四日間とと素晴らしい晴天に恵まれることになつたのである。

私達の今回の巡検の目的は、那須野盆地の地形調査であつた。みんなはこれが那須野面、あれが視園面と地形を対比して歩いたが、私は主に美しい景色ばかりを眺めて歩いた。青い空、赤いとうがらし畑、そして熟れた実をいつはいつけた柿の実。柿の実の黄色と空の深い青の鮮かな映りはゴツホに感じた位、印象的なものであつた。田んぼと収穫の時期で稲穂は黄金色であ

つたし、稲刈をしている人々の姿もあつた。八溝山地は連なる峯々と山ひだをくつきりと見せてくれをし、那須岳は、雲や煙かわからないが白雲を頂きに濡れせながら、どつかりと目の前にすわつていた。」

ところで私達の行状とまた愉快で驚歎なものであつた。第一日は大田原の地形的には金丸原面に対比される小さな山の麓を徘徊して、泉を見たり、河岸段丘を見たりした。泉からは木のきれいな小川がはじまつていた。泉は谷頭侵蝕によつてできたという。そしてその付近の二軒家の傍には栗の木があつて昨夜の暴風雨の爲であるが、栗が沢山落ちていた。勿論私たちはそれとせつせと拾つて宿をゆめて御馳走になつた。

次の日は黒羽の農家に上り込み色々な話を伺つた。その時松井先生に致つたことは、聞きこみの時は知つていふことをと聞いた方が会話をスムーズにする為にと良いということである。そこのお宅では大変親切にして下さつた。御馳走になつたしやうがのお菓子は珍味であつた。それから牛の横をこねぎら通りたり、雑木林を通つたり、山頂から遠くを見渡したりしながら山を一つ越し、ある中学校の運動場を横断し(窓からたくさん人のギョロギョロ目玉がみていました)それからものすごい早足で先生はつづき、汽車でちよつとのことで乗り遅れ、小さな駅のそばの道端で一日の復習を終えた。

三日目は崎王という巖頂部に近い部落に行き、水利権の問題などについて聞き、用水路を見、それから長いことかかつて林を通り抜け、大きな礫がごろごろしている畑のそばを通つたりしながら、ある農家の屋敷の中を通り抜けた。その屋敷には手頃な柿の木があつたので、我々チビ助さん達はノツボの鶴尾さんに柿の実をといでもらつて大喜びで食べて歩いた。この巡検中、柿はどこにもあつたが、道端の手のとどくところにあるのはみな茨柿だつたさうである。

それからニジマスの養魚場に行き、スイスイといばつたように泳いでいるマスを見物した。ここでは崖の下(小川?)湧水を利用して養魚が行われていた。さて四日目はちよつとした記録があるので以下に記すことにする。

(エピソード)

1m50cmまでボーラーをさす。うまい具合にさせたが抜けません。14名が代わるがわるボーラーを廻そうとするがビクとしぬい。みんながとうとう根尽きて近くの農家で、くわとシャベルとくまきを借りてきて穴掘りを開始する。中神さん鶴尾さん草向さんが一番活躍する。宇野さんと巧い。草向さんのは、単期が入つているのださうだ。秋元さんのへつぱり腰の大奮闘も印象的。鶴尾さんが土をほうり投げるときに北村さんの方へとび

北村さん傍観すること能わず。田の所有者である若い男の人が加勢に素てくれる。その人のシヤベルさばきの巧いこと！やはり専門家にはかなわない。そのの／＼分位でポーラは地上へ生還。ポーラーノ本3万円也は無事ととのさやにおさまりました。シヤベルは塵分よれよれしかつたけど、とうとう前歯が折れました。

崖の高さを計ろうとすると蛇がドスンと落ちてきた。一番逃げ足の早いのは長谷川さん。一番落ちつきはらつてゐるのは守野さん。先生は2番落ちつてゐる。蛇は2匹いた。アヅエックで散歩をしていたらしい。

今日の勉強はこれでお終い。青藤、北村のカップルと細谷、中神のカップルは東北へ。草野さんは単身那須岳探検へ。小玉さんは大田原市のさる方の所に。(お土産はとうがらしの佃煮だつたとかや)あとの残りは東京に向う。

以上のごとく、この巡検の表面をつらつらつらぬてみました。実際はとつとつとよかつたのです。ええ。宿はやつぱり上洲屋でした。

## 後輩諸嬢へ

坂井和子

(昭和28年度卒)

このたび、先輩として一筆書いてほしいとの御依頼を受けましたが、いろいろ御注文がむずかしくて、限られた紙数に何をどう書いてよいやら、文才のない悲しさで迷つてしまいます。ただ、御注文の中には、このごろまた教師になる人が多くなつたとかで、そういう面で体験を語つてほしいということがございましたので、そのことを中心にまとめてみたいと存じます。

実のところ、私などは教師になるつもりは毛頭なかつたのに、ひよつとしたことで向となくなつてしまつたので、大変けしからぬ話ですが、特に教育に対する情熱とか抱負などといったものもなく、この道にとび込んだわけでございますが、以来十年、今ではすっかりこの仕事に打ち込んでゐる自分を見出して、我ながら感心している次第でございます。ことほどさうは、この教育という仕事は、これに手をつけた者をとらえてはなさない何か不思議な魔力を持つてゐるように思われます。

それは結局、生きとの相手の仕事だからでしょうか。とにかく、いいかげんな気持、お座なりの態度ではどうもいやつていけません。そういう意味では大変きびしい仕事ですが、またそれだけに、いやおうなしにファイトをやさざるを得ませんし、張り合いのある仕事とといえましょう。